

痛みはお薬

karinomaki

はじめに

私には、心の痛みがあります。しかし、そのおかげで私はたくさんのことを考えることができ、大切なものを得ることができました。この文章では、痛みをお薬にかえる魔法について書きたいと思います。

トラウマ

人は一度トラウマをつくってしまうと、大きな問題が起きても、逃げ腰になりやすくなってしまったりします。ショックを受けやすくなり、ちょっとしたことで、傷を受けやすくなったりします。私もそうなので、自分を弱い人間だと思い、落ち込んだりしました。しかし、私は、その傷口から宝物を見つけました。私の傷と、弱さが引き寄せてくれたのです。そして、私は傷を包み込んで、傷をお薬にかえる術を知りました。そのとき、私は傷を受ける前よりも強くなった気がしました。私は傷があるから魔法を手に入れたと思っています。その魔法と、傷を包み込む方法を書きたいと思います。

自然治癒力と奇跡の力

子供の頃、私は心に大きな傷を負いました。その傷がもとで、私は人を信じられなくなり、心がゆがんでしまったのです。大人になってからも、そのトラウマから逃れることはできず、私は何かを必死に探しながら生きていました。私が探していたのは、きっと信じる気持ちだったと今はわかるのですが、探し続けていた頃、何か支えが欲しくてもがいていました。今、支えとは、自分の中にあったのだとわかりますが、その頃は、外に向かって探していたと言えます。

なぜなら、私は心の傷や空白をいやす傷薬を探していました。傷薬が、自分の中の自然治癒力であるとは思ってもよらなかったのです。

世界には、奇跡が存在すると私は思っています。しかし、その奇跡は、自分はどうしようもない人間だから、何かに助けてもらいたいと思って、外を探しても見つからないのです。私は子供の頃の傷がもとで、心がゆがんでしまっていました。そして、外に向かって傷薬を探していました。しかし、最良の傷薬、奇跡の力は、心の傷を優しく包み込み、ゆっくりいやして治癒力をつくることだったのです。自分の中にあったのです。

痛みはお薬

痛みそのものがお薬です。痛みから逃れるように、外に救いを探すことから始まって、じたばたしたあと、痛みは心の中心へと、いやす力を引き込みます。そして自然と心の中心に向かっていった私は、痛みの中に大きな力が存在することに気がついたのです。痛いから人は逃げようとして、外に救いを求める。私はそんな時に、哲学と出会いました。

哲学は、探し求める姿勢を最も重視する学問でした。私が研究し始めたカントという哲学者は、世界の限界をこえるために、人間の内面を徹底的に研究した人だったのです。

私は心が痛いから、外へ向かって、世界の限界をこえた力を求めた。それは哲学の第一歩だったかもしれません。しかし、私が、心の痛みとともに探し求めて見つけた自然や町は、とても色あせたものでした。私は気がついたのです。自分が心の痛みをもっていることから逃げるのではなく、痛みを受け入れ、許そうと。

痛くてもいいやと思い、それをどうやっていやしていくのか考えようと思った私は、外へ逃れるような姿勢で哲学するのをやめて、自分という人間の心の在り方を見つめることができるようになっていました。

純粋理性批判と実践理性批判

カントの著書である、純粋理性批判は、人間の認識の謎から始まり、世界の限界や神の存在の有無について広がる、内（人の心）から外（世界）へ向かうイメージです。そして、次の実践理性批判は、人の心の在り方を書いたものです。私の心と照らし合わせると、苦しきから外へと向かって助けを求めたあと、心という原点にかえってくるという状態を表しているのと同じではないかという気がしました。私はこのことがもとで、カントの哲学に自分の心を照らし合わせて哲学してみようと思い立ったのです。

人を信じる気持ち

大切なものを失ったとき、また、心に傷を負ったとき、すぐにかわりになるようなものや、傷薬は見つかりません。しかし、長い時間をかけて、人は大切な心の宝物を見つけます。それは、自分が苦しい目にあった意味を見つけることです。

私は心が傷だらけで、まわりを見まわしても何も見つからず、十年ちかく空虚な日々を送りました。トラウマだらけで、心も弱かった。しかし、自分の心のくぎを抜く方法を見つけました。それは、人を信じる気持ちでした。

私は、苦しかったから、人の温かさが心からわかったのだと思います。そして、心の傷をいやすものを外に向かって探し続けた日々が、自分の心と向き合う強さをつちかってくれました。鮭は、川から海に出て、生まれ故郷の川にまた帰ってくるそうです。人も、苦しい心の旅をして、心の原点にかえってくるのだと思います。それはきっと、苦しみに逃れてさまよったのち、強くなって苦しみをいやす力を手に入れるからです。

人を信じられなくなって、色あせた苦しみの世界で救いを探し求める日々を送った私は、心をいやしてくれる人々と出会い、心の原点にもどりました。その時、私は探し求めた日々の意味を知ったのです。強くなって人を信じる気持ちをつちかうために、私は旅をしていたのだと。もし、私が苦しみに出会わなければ、人が心をいやしてくれる大切さに気がつかなかったかもしれない。そして、苦しみをいやすものを探してさまよわなければ、強さというものの大切さに気がつかず、何も築こうとせずに日々を送ったかもしれない。

私は、全てのことに意味があったことがわかりました。そのとき、私の傷は、私を強くするお薬にかわっていたのです。

カント

カントは、十数年かかって、苦しみながら純粹理性批判を書いたと思います。カントが私と同じ心理状態であったとは考えられませんが、あまり人に心を許さず、自分の心と格闘して書いたのではないかと思います。私のイメージでは、心にまっすぐ、くぎをさしこんで、心の在り方から始まり、外へ向かって、世界の限界をこえるような感じです。しかし、次の実践理性批判で、心と真剣に向き合うことで、本当の意味で世界の果ての樂園を書こうとしている。苦しいことと向き合うつらさを持つ全ての心美しく強い人の気持ちを、カントは誰よりも知っている気がします。カントも、きっと心の原点にもどり、「人の心は美しい。人を信じることができる」と思って実践理性批判を書いたと思うから。

心の強さ

人は心の強さをつくるために傷つき、苦しみと戦うのだと思います。その戦いはずっと続くのかもしれませんが。しかし、この大切なことをつかむために苦しかったのかと、苦しみの意味に気がついたとき、人は心の宝を手にはしています。それは、人生の意義です。決して色あせない永遠の宝（傷薬）は、痛み、苦しみそのものなのかもしれません。